

令和8年度幼児教育研究協議会 概要

1 講話について

記録者 幼稚園型認定こども園紫幼稚園 高島 桂子
あおい幼稚園 津沢 亜由子

(1) 幼児教育に関わる法令

- ・幼児期の教育は、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」である。(教育基本法第11条)
- ・小学校以降の教育との発達や学びの連続性が明確となるように、学校種の規定順について幼稚園を最初に規定している。(学校教育法第1条)

(2) 幼児教育の基本

① 「環境を通して行う教育」(幼稚園教育要領 第1 幼稚園教育の基本)

- ア 幼児が自ら興味や関心をもち、試行錯誤をしながら環境へのふさわしい関わり方を身に付けることを意図する。
- イ 幼児教育における環境とは、幼児を取り巻く全ての環境のうち、幼児との直接的な関わりを前提として、一人一人の育ちを促す園内外の環境を指す。

② 重視する事項

教師との信頼関係や直接的な体験を大切にし、5領域のねらいを踏まえ、個々の特性や発達に応じた指導を行う。

③ 環境の構成

物的環境、人的環境、自然や社会事象等の環境条件を相互に関連させ、幼児が主体的に活動を行える状況をつくったり、幼児の視点や活動の流れに即して環境を再構成したりする。

④ 保育者の役割

活動の理解者、共同作業者等としての、重要な環境の一つであることを意識する。

(3) 幼児教育において育みたい資質・能力の3つの柱、3つの視点、5つの領域及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」

- ① 「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を育成する。
- ② 身体的発達、社会的発達、精神的発達に関する視点を基に育てたい力の基盤を培う。
- ③ 健康、人間関係、環境、言葉、表現の5つの領域のねらいと内容に基づいて総合的に指導する。
- ④ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて、発達を捉える。

(4) 幼児理解に基づいた評価

- ① 幼児理解に基づく循環の中で、個々の発達の特性に応じた援助を行う。
- ② 常に幼児の姿から指導の過程を振り返り、改善を図る。
- ③ 評価・改善の積み重ねによって資質・能力を育む質の高い幼児教育が実現されていく。

(5) 幼児教育と小学校教育の接続による教育の充実について

- ① 互いの専門性や子どもの姿への理解を深めるため、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに語り合い、連携・協働を進める。
- ② 教育の連続性・一貫性を踏まえた架け橋期のカリキュラムを実施する。

(6) 文部科学省幼児教育WGにおける現行の成果・課題を踏まえた要領・指針の改善の方向性

- ① 資質・能力の育成に向けた「遊びの深まり」の実現を目指す。
- ② 3つの視点と5つの領域、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の関係性を明確化し、相互の整合性を図る。
- ③ 長期的な視点から乳幼児の資質・能力の育成を促すとともに、0歳から18歳までの「学び」の連続性・一貫性を見通し、内容の改善を図る。
- ④ 幼稚園・保育所・認定こども園と小学校が、対話を通して互いの教育への共通理解を深め、学びのつながりを意識した教育の充実を目指す。

2 研究発表①について

発表者 アームストロング青葉幼稚園 今泉 真璃亜

記録者 認定こども園 徳風幼稚園 中村 彩子

(1) 協議主題

幼児教育と小学校教育の接続による教育の充実について

(2) 研究の視点

- ① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、幼小の連携・協働による架け橋期の教育の充実を図る。
- ② 幼小が互いに歩み寄り、双方の教育に理解を深めることで、本園における初めての架け橋期のカリキュラムの作成・実施を進める。

(3) 実践より明らかになったこと

- ① 小学校への就学を見据え、主体性や社会性を育むために設けた対話の時間「なかよしタイム」の話題から、子供が興味をもったことを捉えて交流活動を展開したことは、子供の主体性を軸に、様々な学びに繋がった。子供同士の交流の中で見られた育ちを、園だけでなく小学校教員も感じることができた。このように、幼児教育で育まれていることを小学校教員が理解することは、幼小が連携・協働した架け橋期の教育の充実につながる。
- ② 架け橋期カリキュラム作成の第一歩として、教職員同士が互いの教育で大切にしていることや取組の内容を伝え合う場を設けたことで、子供の育ちや学びの繋がりを考えることができた。進学先が同じ近隣の幼児教育施設とも情報交換をしながら、架け橋期のカリキュラムの作成・実施を進めていくことが大切である。

(4) 指導助言事項 東部教育事務所 福田 慈子 指導主事

① 視点1について

子供が小学校に興味・関心をもったことをきっかけに、交流活動へと発展したことで、子供自身が必要感をもって取り組む活動となっていた。その背景には、教師が子供の話から解決へと導くのではなく、あえて聴き役となり、子供の発想を広げるための援助に徹していたことがある。こうした教師の姿によって、その活動の中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が育まれた。また、幼小の双方の教育で大切にしていることの意見交換をした上で交流活動を行った。小学校教員が幼児教育への理解を深める上で、実際に子供が主体的に活動する姿を見ることには大きな意味がある。幼児教育で大切にしていることを言葉で説明するだけでなく、目の前の子供の姿を通して共有することが、幼小接続を進める上で重要である。日頃の教育を大切にしながら、それを小学校教員に伝え続けることが、円滑な接続の推進につながる。

② 視点2について

架け橋期のカリキュラムを作成するに当たり、幼児教育施設だけでなく、小学校の思いを反映することが大切である。進学先が複数の小学校に分かれる環境では、近隣の幼児教育施設同士が連携し、情報交換や共通の活動を行うことも重要である。こうした取組は、小学校側にとっても地域の幼児教育施設との関係づくりを考えるきっかけとなる。さらに、幼児期の経験が小学校での学びにどのように繋がるのかを具体的に共有することが、学びの連続性を生み出す。今回の取組を一つのきっかけとして、子供主体の交流、近隣施設との横の連携、小学校への働きかけなど、できるところから継続していくことが幼小接続の充実につながる。

3 研究発表②について

発表者 西加積認定こども園 高橋 由衣

記録者 早月加積認定こども園 山東 加奈栄

(1) 協議主題

幼児教育と小学校教育の接続による教育の充実について

(2) 研究の視点

- ① 架け橋期の教育の充実に向け、幼児教育から小学校教育の学びをどのように繋いでいか、その際「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を踏まえ、育みたい子供の姿を想定した具体的な手立てについて探る。
- ② 子供たちの学びを途切れさせないために、教育の連続性・一貫性を踏まえ、「架け橋期カリキュラム」を作成・実施・評価・改善し、具体的に実践していくためにはどのような取組が必要かを探る。

(3) 実践より明らかになったこと

- ① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基に作成した「10の姿シート」や「保育参観シート」等を活用して幼児の育ちを可視化したことで、小学校教員に幼児期の学びや育ちを具体的に伝えることができ、幼児期に培われた資質・能力や学びについて共通理解を深めることに繋がった。

保育者と小学校教員が、互いの保育や授業を参観し、子供の姿を伝え合うことは、学習活動を見直すよい機会となり、学習意欲や安心感に繋がるなど、幼児期の学びを小学校教育へ円滑に接続するための有効な取組となる。

- ② 保育通信を通して小学校教育との交流や連携の様子を保護者と共有することで、家庭を含めた接続期の支援の在り方について理解を深めることができた。

幼児教育と小学校教育の接続では、両方の環境を同じにすることではなく、育まれた資質・能力を基盤として、子供が新しい環境に対して主体的に乗り越えていく力を育てることが大切であるということが分かった。また、幼児教育施設での遊びや生活の中で育まれた「学びの芽」を踏まえて授業づくりを行うことで、子供たちは安心して学びに向かうことができ、学習意欲の向上や教育の連続性・一貫性の実現に繋がる。そのためには、継続的な情報共有や合同研修を通して、互いの教育を理解し合うことが重要である。

(4) 指導助言事項 東部教育事務所 福田 慈子 指導主事

① 視点1について

「10の姿シート」は、一人一人の具体的な姿を通した育ちが記されており、小学校教員が、子供の育ちや幼児教育で大切にしていることを理解する上で、非常に有効な手立てである。「保育参観シート」は、小学校教員が、幼児教育について視点をもって保育を参観するための有効な手立てである。子供が主体的に遊ぶ中で子供の学びを見取することは、小学校教員にとっても子供理解に繋がる。この取組は、保育者と小学校教員双方の子供を見る目を養い、学びの連続性に関する共通理解を深める上で重要である。双方の日程が合わない場合には、協議会を参観シートでの伝え合いに代えたり、記入範囲を一部にしたりするなど、状況に応じて無理なく継続することが大切である。

② 視点2について

幼児教育施設と小学校が連携・協働した取組として、双方の教員が互いの指導方法の違いを比較・検討しながら理解を図ったり、相互参観を通して環境構成の見直しをしたりしている。これらの取組は、単に互いを真似るのではなく、子供の学びが継続することを意識し、目の前の子供にとって何が有効かを考えて改善していくことが重要である。また、保護者との連携においては、アンケートだけでなく日々の会話を通して保護者の思いを把握し、不安の解消に努めたり、子供の成長への期待を共有したりしている。今後も子供を保護者と共に育てていくという意識が大切である。さらに、保育者・小学校教員・保護者・地域が連携し、子供の成長を支える関係づくりを一層進めていってほしい。